

# 特定非営利活動法人 Tuvalu Overview

## 2020 年度活動報告書



2020年6月4日 植林の様子

Tuvalu Overview



特定非営利活動法人 Tuvalu Overview

〒110-0001 東京都台東区谷中 7-5-5

電話 03-5834-1456 FAX 03-3821-7898

<https://www.tuvalu-overview.tv/>

2021 年は山のツバルがある鹿児島では 5 月 11 日に梅雨入りし、直後から猛烈な雨が数日続きました。

観測史上 2 番目に早い梅雨入りとのことですが、この調子で豪雨が降り続いたら大変な被害が出るのでは？と心配していました。しかし、その後は穏やかな梅雨空が続き、安心していただけ、静岡での豪雨、それに伴い熱海では土石流が発生し大きな被害となっています。日本全国には山頂付近の産廃やソーラー関連の乱開発が幾多もあると思われます。総合的に見直す時期を警告されているのではないのでしょうか。

海外に目を向けると、北米を中心に熱波の被害が拡大しています。数日前のニュースではカナダで大規模なヒートドームが発生し、気温が 50 度まで上昇、486 人が突然死するという報道がありました。地表面温度は 63 度を観測、北米大陸の東海岸では山火事も頻発しています。

この状況を『気候危機』と表現するようになってきています。その防止策として UNFCCC が主催する国際会議では、さまざまな方策を策定し各国が批准してはいるものの、2 月 26 日に発表されていた報告書「Initial NDC Synthesis Report」では『大多数の参加国が個々の排出量削減の意欲を高めているものの、その影響を総合すると、2030 年までに 2010 年比で 1%未満の削減しか達成できないことがわかりました。一方、気候変動に関する政府間パネルは、1.5℃の気温目標を達成するための排出量削減範囲を約 45%低くすべきだ』と指摘しています。

また、AFP が独自に閲覧した 2022 年 2 月に公開予定の IPCC の 6 次レポートの草案のなかに

Initial NDC Synthesis Report の記事  
<https://unfccc.int/news/greater-climate-ambition-urged-as-initial-ndc-synthesis-report-is-published?fbclid=IwAR3jQPgr9CdYgLeAt13sLhYpdDJ3dqxoFzQeaMqB60i2rs7wCtgliuMNEs>  
AFP IPCC レポートに関する記事  
[https://www.france24.com/en/live-news/20210623-crushing-climate-impacts-to-hit-sooner-than-feared-draft-un-report?fbclid=IwAR2eym1yz\\_u4b6Us9i3wofVwSx71Y-g3vY2N3pN81WzYFkcKNlv8TxxGc-0](https://www.france24.com/en/live-news/20210623-crushing-climate-impacts-to-hit-sooner-than-feared-draft-un-report?fbclid=IwAR2eym1yz_u4b6Us9i3wofVwSx71Y-g3vY2N3pN81WzYFkcKNlv8TxxGc-0)

『種の絶滅、病気の蔓延、生きられないほどの暑さ、生態系の崩壊、海面上昇に脅かされる都市など、これらやその他の壊滅的な気候の影響は加速しており、現在生まれている子供が 30 歳になる前に、痛々しいほど明らかになるに違いありません。』と記載があることを 6 月 23 日に報道しました。記事ではこの報告書が半年先にならないと公開されないことにも不満を提示しています。

このような研究結果を突きつけられて、私たちには何ができるのでしょうか？国として削減計画を先導しなければならない日本政府は、長期に渡り政権を自民党と公明党に任せてきたことが原因で、機能不全に陥っています。政府主導での防止策はしばらく期待できないのが現状です。今まで以上に一人一人の行動が大切だと思います。

当団体では COVID-19 の影響で海外での活動を一時停止しています。賛助会員・一般会員の皆様、またコスモエコカード基金と会員の皆様には、長年にわたる活動へのご支援をいただきましたこと、心より感謝を申し上げます。今後は「山のツバル」での活動を中心に（体験事業は見合わせざるう得ない状況ではありますが）実験例や成功例を広く公開していくことで、低炭素社会の実現を目指した啓蒙活動を続けていきます。引き続きのご支援を何卒よろしくお願いたします。

2021 年 7 月 4 日



遠藤 秀一 ツバルオーバービュー代表理事



台風 10 号（ハイシェン）の強風で倒壊したテント車庫。（2020 年 9 月 7 日）

## フナフチ環礁、アバラウ島での植林



2020 年 06 月 04 日

この日がツバルオーバービュー主導で行う最後の植林となりました。15年に及ぶプロジェクトですが、ツバル国での活動はコロナ禍の影響により一時休止となります。今後しばらくはツバルのユースグループなどの自主的な植林活動に委ねることになります。

中締めとなったこの日はユースグループの参加のもと 1000本の植林を行いました。



2020 年 08 月 20 日

首都があるフナフチ環礁のフナファラ島で健康に成長し続けているヤエヤマヒルギの様子です。

10年以上経過し、樹高8mほどになっています。このまま成長し続けて森を拡大して欲しいものです。



2020 年 06 月 17 日

こちらは北端のナヌメア環礁に自生するヤエヤマヒルギの様子です。今年度制作した植林マニュアルにツバル全域の情報を記載するために、全島調査を行った際の写真です。

離島には自生するマングローブも多く、種を確保することも容易なので、各島で自主的な植林活動が進むことも目的に、植林マニュアルを制作しました。



2020 年 5 月 23 日

Tuvalu Overview とコスモ石油エコカード基金が実施してきた植林事業は、フナフチ環礁の町役場に委譲されました。フナフチ町役場は独自にスポンサーを探して植林事業を続けていきたい旨を表明してくれています。写真右端の現地駐在員の河尻氏は8月に日本に帰国しました。

河尻さん、2年間の駐在お疲れ様でした。



2006年に開始したマングローブ植林事業の総括としてマニュアルと動画を制作しました。この15年間に、皆様のご支援のもと、植林した苗の数は116,000本に及びます。3割ほどの定着率となっています。

この長期の経験の試行錯誤の積み重ねから得られた「塩水域でのマングローブ植林」という特殊例のノウハウをわかりやすくまとめてあります。ツバルの方々だけでなく、南太平洋の各地域で活用していただける内容になっています。

動画はマニュアルの補足版となりますが、美しいツバルの風景をゆったり楽しんでいただけるように構成してみました。こちらも是非ご覧ください。

マニュアルは下記からダウンロードできます。

[http://www.tuvalu-overview.tv/pdf/mangrove\\_manual.pdf](http://www.tuvalu-overview.tv/pdf/mangrove_manual.pdf)



動画は上記QRコード、もしくは次のアドレスで再生できます。 <https://youtu.be/R4Ff6DD3T1w>

詳細は <http://yamano.tv/> をご参照ください。



自然農での稲作は今年で10年目となります。山のツバルから徒歩で5分ほどの圃場を借りることができたので、思い切って圃場を移動することにしました。

長年の耕作放棄地です。猪に掘り荒らされていて表面が凸凹になってしまっていたため、近所の農家さんをお願いしてトラクターで耕してもらいました。

その後、代掻きを依頼するために数十年間使われてこなかった水路（湧水池まで350m）を掘り起こし復活させ、水を確保しました。写真は水が入り始めた瞬間です。この作業は果てしないものでした、



おが屑トイレをし尿分離にしてから、尿の処理方法を検討し続けてきました。「ガーデンベット」という方法をインターネットで発見し、早速設置してみました。

有孔パイプを埋設して尿を流し込んで、土中の微生物に分解してもらう方法です。分解された尿は養分となって地上の作物に届くとのこと。

このあと、この畑ではゴーヤ・生姜・レタスなどを栽培しました。どれも豊作となり、ガーデンベットが機能しているように思います。



気候変動防止のための生活を実現することが、ここでの暮らしのコンセプトです。

食とエネルギーまでは道筋が見えていますが、移動に関わるエネルギーの自給が欠けていました。とある機会があり、念願の電気自動車導入となりました。代表の遠藤が貯金を叩いて購入したものです。

三菱自動車のMINICAB-MiEVという軽バンです。SCiBという高性能なバッテリーを搭載したモデルの、最後の一台を手にすることができました。天気の良い日は庭のソーラーパネルで充電できます。



新しい水田は山の湧き水が周囲から勝手に湧き出してしまう、水の多い圃場でした。水が勝手に入ってくるので、稲刈りまでは管理も楽だったのですが、稲刈りの季節になっても水を止めることができず、ぬかるんだ状態での稲刈りとなりました。

見かねた近所のおばあちゃんが助っ人になってくれました。さすが年季が入っていて90歳を超えているとは思えない超人的な速さの稲刈りを披露してくださいました。

足腰も強く、頭もしっかりしている彼女を見ると、こういう年寄りになりたいな〜と憧れます。



2020年11月01日

コロナ禍の下、講演会も写真展も開催することが難しい状況が続いています。そのような中で、今期は1回だけ大分でトークショーの機会をいただきました。

1部は子ども向け、2部は出店者向けという構成で行いました。出店者向けのトークショーは初めてでしたが、とても有意義な取り組みになりました。



2020年11月01日

大分の田浦で開催された「エコブルー 今日ゆっくり eco がいい× blue market」会場でのトークショー、子どもの部の様子。意識の高い親御さんのお子さんばかりの参加となったので、踏み込んだ話もでき、好評でした。

2回目の大人の部では、気候危機防止に取り組みながらも、自らの生活の安全保障を進めるべきであることをお話ししました。UNFCCCの会議の遅々として進まない状況や、日本政府の対応の鈍さなどを見ていると、間に合わない状況も想定する必要があると考えています。



2020年11月01日

大分では湯布院に一泊しました。翌朝、訪れた公衆浴場でスーパーボランティアの尾島春夫さんにバツタリ遭遇！

『口動かすより体動かせ!!』災害現場で何か一言を求められる時に1番よく言うことだそうです。深く同意です。飾らない、偉ぶらない、立派な方でした。



2020年9月に発刊、「2021新書大賞」に輝いた名著です。

気候危機、コロナ禍、政治の腐敗・・・私たちは未曾有の災害の中に生きています。本書は、私たちが直面している困難の原因はたった一つであり、その解決策があることを哲学の視点から説明しています。哲学者がこれほど分かりやすく事例を紹介しながら問題解決を啓蒙する本に初めて出会いました。

通常、哲学書は簡単に見える単語でも研究の変遷で積み上げられた歴史を知らなければ読み取ることができない、一般人には理解不能なものがほとんどです。研究論文のような物ですから、当たり前といえば当たり前なのですが、、英語やドイツ語で書かれたものを日本語に翻訳していることも勘案しなければなりません。私が芸術大学建築学科に在籍していた頃には既に、建築家は哲学を語れなければいけない、みたいな風潮があったので、その類の本を一生懸命読みました。

真面目に研究している哲学者の方々には失礼ですが、哲学書が役に立ったか？という、正直に言うと役に立ちませんでした。強いて言えば、有名建築家の講演会に付随するパーティーの席で、ちょっとそれっぽい話ができる。程度のことでした。しかし、斉藤幸平さんのこの新書は私たちのために書かれた分かりやすい啓蒙書になっていて、多くの人にお勧めできる内容です。

おすすめする理由はそれだけではありません。1998年にインターネットのトップレベルドメインのプロジェクトで訪れたツバル国での経験を元に、私が2004年に上梓した写真集「ツバルー海拔1メートルの島国、その自然と暮らし」の巻末では、「モノに頼らない」ライフスタイルの提言をしました。その後の講演会では、気候変動を防止するためには「モノ」ではなく、その取引に使われる「お金」（これも商品券と思えばモノですが）に頼らないライフスタイルを提案してきました。食べ物やエネルギーを自給できるようになれば、お金への依存度を下げて、気候変動の原因となる温室効果ガスの削減が、私たちの生活の中で確実に実行できるからです。

多くの会場で「そんなことをしたら経済がまわらなくなるのでは？」という質問を受けました。人間にとって最適な環境があるからこそ、経済を回すこともできるのだから、経済の土台になっている環境を守りながら生きていかなければ限界が来るのではないのでしょうか。そのような返答をさせていただくことが多かったように思います。

ここで「経済」とは何か？と言うことに踏み込んで考えなければならなかったのですが、私は残念ながらそこまでは至りませんでした。2015年、環境ジャーナリストの枝廣淳子さんの「幸せ経済社会研究所」が企画した『100人に聞く「経済成長についての7つの質問（[https://www.ishes.org/project/responsible\\_econ/](https://www.ishes.org/project/responsible_econ/)）』に回答した際には、ツバルでの経験をもとに「全てを数字に置き換えることが間違いの始まりではないか？ [https://www.ishes.org/project/responsible\\_econ/enquete/enq085\\_endo.html](https://www.ishes.org/project/responsible_econ/enquete/enq085_endo.html)」と言う内容を提言しています。今読み返すと、もう一步踏み込む必要があったことを感じます。

100人の回答を読んでみると、私がツバルで感じたことと同類の内容もあります。しかし、今の経済のベース、そのものが間違っているのだと指摘した人はいないように思います。（全員分は読んでいないので、もしかしたらあるかもしれません。）



1998年にツバルを訪れた際、首都のフナフチ環礁フォンガファレ島の人口は3千人程度、椰子やパンダナスの森の中に民家が点在する実にのどかな町でした。道路は舗装されておらず、

凸凹道で車やバイクは無く、人々は徒歩か自転車を利用していました。資材を運ぶためのトラクターが目立つくらいで本当に静かな首都でした。首都のさらに先にある、連絡船で何時間もかかる離島を訪ねれば、笑顔が溢れる自給自足の暮らしを目の当たりにすることもできました。

歩けば数時間で一周できてしまうような小さな離島には数百人の島民が、お互いに助け合って生活していました。男は百姓並みになんでもこなし、女は家事に専念し、子育ては島のコミュニティ全員で行う。そのような暮らしです。男たちは遅しくナター本あれば無人島でも生き抜いていける知恵も身につけていました。



大きなカルチャーショックでした。それまでの東京でのお金で全てを処理してきた暮らしぶりが、軽薄なものに感じられるとともに、この幸せに満たされた小島の生活に憧れました。30歳になってツバルで気付かされたことが沢山ありました。

- ・ お金で処理する背後に隠された資源の膨大な浪費と無駄
  - ・ 貧富の差が生み出す不公平と幸福感の喪失
  - ・ 島の面積にもマンパワーにも常に限界がある暮らし
  - ・ 消費物が目の前になればお金を稼ぐ為の労働もない
  - ・ 魚も野菜も貯蓄することなく分け合って楽しむ暮らし
  - ・ ラジオもテレビもない暮らしの静けさ
- etc...

その中には気候変動に関連することも多くありました。

この経験から、お金だけに強く依存せざるを得ない東京での暮らしを改めるために、2011年に鹿児島に生活の拠点を移し「山のツバル」を開設しました。今では電気と薪を自給し、お米や野菜も育てながらの生活に至っています。お金を使って人にお願してきた多くの事柄を自分の手中に納めることができるようになってきています。このことは気候危機防止にも有効ですが、災害に直面した時にでも有効です。

私と同じような気付きを得てほしいと、ツバルへのエコツアーを開催してきました。しかし、首都の島は2000年以降、急速にグローバリズムに浸潤されていきました。2020年以降はCOVID-19の影響もあり、エコツアーは開催できませんが、そもそも、エコツアーの目的を達成できる目的地ではなくなってしまったとも言えます。



グローバリズムとは一体なんなのだろう？多国籍企業による地球の独占ではないのだろうか？色々考えましたが、斉藤幸平さんのこの本に出会って、多くの謎がクリアになりました。私たちが抗っていかねばならないのは今の経済のベースになっている「資本主義」そのものだったのです。

私たちは単純に『日本や先進国は「資本主義」の国です！』と学校で習いました。資本とは？と言う疑問を抱いたこともないと思います。しかし、よく考えてみると、資本主義は蓄財主義と言い換えることができます。その結果、1800年後半に始まった蓄財主義は1世紀足らずで、たった26人の人間が世界人口の半分の資産を所有するまでに至ったのです。それを無意識に支え続けた結果が、今、目の前に山積している社会問題の数々です。

解決策は資本主義からの脱出だったのです。

私の下手な文章はこのくらいにして、ぜひ、『人新世の「資本論」』を手にとってみてください。20年前のツバルを訪れること以上の価値があります。

2021年7月4日



遠藤 秀一  
ツバルオーバービュー代表理事